
花畑（F F 6）

Я

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花畑（FF6）

【Nコード】

N9363A

【作者名】

Я

【あらすじ】

あの大戦から1年。世界は平和になり、安らかな生活を送っていると思っただけ。しかしロックは、今だ迷っているものがある。
・
・
・
・
・

前編 〓いつのまにかの恋模様〓（前書き）

FF6エンド後の話です。多少ネタバレの危険がありますので、御了承下さい。

前編 　　いつのまにかの恋模様

いつから、あなたが大切になったのかな

「セリス！ あれ頼む！」

「ええ！！」

ロックに指示され、セリスはすぐに魔封剣の準備をした。

「魔封剣！！」

そう叫んでセリスが差し出した剣は、魔物から出た強力な魔法を吸収した。

その瞬間をつき、ロックが一気に魔物に切りかかる。

「はっ！」

「ギュギャアアアアアアアア！！！」

ロックの体重をかけたラグナロクに引き裂かれた魔物は断末魔の叫びを上げたかと思うとすぐに宙へと消えた。

「ふう、おつかれセリス。ケガないか？」

「ええ、平気よ。ロックは？」

「俺もだいじょーぶ！」

にかつと笑顔を返され、セリスは胸が高鳴った。

ケフカ達帝国に世界を崩壊され、その長い大戦を終えてから約1年。今は帝国の姿もない世界に、人々は安心してそれぞれの暮らしを楽しんでいた。

かつて共に戦った仲間達は、それぞれの帰る場所へと帰還し、離れ離れとなっている。

そして、あの大戦で結ばれたロックとセリスは今、ナルシェで共に暮らしていた。

「はー、フィガロに久しぶりに行って、ナルシェに帰ってきたのは良いんだけどさ。どうしてこう魔物が多いんだろうな？しかも世界が崩壊してから強い奴ばっか出るしさー・・・。」

ロックがぶつぶつ文句を垂れていると、セリスはくすりと笑い、金色に輝くウェーブの髪を払いながら言った。

「しょうがないわよ。まだあれから1年しか経っていないのよ？それに、ケフカ達がいらないだけまだマシってものじゃない？」

セリスの冗談混じりの言葉に、ロックは目を細めて「ははっ確かに」と笑った。

フィガロからナルシェへ帰る途中の草原は魔物も多いが、景色が素晴らしく良かった。

緑の木々が風に揺れ、花々たちが綺麗に咲き誇る。

害の無い普通の小動物もその花々たちに囲まれ、安らかに眠っていた。

（こんな景色、ロックと出会っていなかったら絶対に見られなかった景色ね・・・。）

僅か18歳という年齢で帝国の常勝将軍と名を馳せたセリス。

しかし、非道な行為を繰り返す帝国を自ら裏切り、投獄された。

その暗い牢屋から助け出してくれたのが、今 目の前にいる愛しい人・ロックだった。

「あ、おいセリス！見てみるよ！ここ一面花畑だぜ！」

まるで子供のようにはしゃいでロックはセリスを手招きした。

招かれるがままにセリスはロックの方へと歩む。

「・・・わ・・・あ・・・」

セリスは思わず感嘆の声を上げた。

目の前に広がる、膨大な景色。

それは、一面の花畑。

何種類もの花たちが一斉に色取り取りの花弁を広げていた。

花畑の奥に見える緑の丘にも飾り程度に花々が咲いており、まさに絶景と言って良い光景だった。

「綺麗・・・・・・・・」

セリスは感動に我を忘れ、手を口元に当て瑠璃色の瞳を潤ませた。

「こんな場所があつたなんて知らなかったな。」

思わぬ秘所を見つけ出したロックもその木色の目を輝かせ、感極まっていた。

何分経つただろうか。

セリスはようやくあまりにも美しい花畑から思考を離し、ロックを見遣った。

相変わらず幻想的な風景に心を奪われているのか。ロックは微動だにしない。

（ロックもこういう自然に興味があるのね・・・・）

いつも波茶目茶で、盗賊紛いな（本人自称トレジャーハンターだが）行動ばかりしていると思っていだら――・・・・

（また1つ、ロックの意外なところを見つけちゃった。）

一年以上一緒にいるというのに、ロックという人間はいまいち掴み所がない。

その為、セリスはロックの全てを知っているわけではなかった。そして今日、また1つ。

ロックを知れたことにセリスは密かに歓喜していた。

（・・・そういえば、いつからだったかしら。ロックのこと、もっとよく知りたいって思い始めたの・・・。）

牢獄から助けられたあの初めての出会いから？

（・・・ちょっと、違うかな。あの頃はロックのことを考えている余裕なんてなかったと思うし・・・。）

では、あのオペラでの出来事から？

（・・・確かに、あの時ロックに褒められたのは、すごく嬉しかった。）

だけど、違う。

もっと、もっと前から・・・

（それとも、初めて出会った時からオペラの間？）

しかし、確信は持てなかった。

いつからこんなにもロックが気になり始めたのか。

もっと、この人を知りたいと思ったのか・・・

（・・・いつのまにか・・・かな。）

そう。

いつのまにか。

意識をしていない、いつのまにかの出来事。

あっという間に心を奪われたのかもしれないし、自然にゆっくりと惹かれていったのかもしれない。

いつから・ではなくて、

（“いつのまにか”・・・か。）

妙に納得のできる答えだった。

（じゃあ、ロックはいつから私を意識し始めてくれたのかしら？）

横に立っているロックをもう一度一瞥する。

白銀はくぎんの髪が太陽の光に反射して、黄金こがねへと色を変える。

藍色のシンプルなバンダナと、耳に刺しているシルバーのリングピアスがよく似合う人——・・・。

（最初に、私のことレイチェルさんに『似てる』って言ってたし、最初っから意識されてたのかな・・・。）

ロックの昔の恋人、レイチェル。

帝国に村を攻められた際に他界した、ロックの1番の想い人だった。最初はただ似ているだけと思っていたロックも、次第にセリス自身に惹かれていったのだ。

そんなロックが、女としてセリスを意識し始めたのはもっと後のことだと思うが。

（だけど・・・普通に、人間として意識はされていた・・・。）

もしかしたら、ロックも“いつのまにか”だったのかもしれない。

互いに、意識をし始めたのは、“いつのまにか”。

（本当にお互いそうだったら、面白いわね。）

無意識に、「ふふ」と声を漏らして微笑んだ。
するとなにやら視線を感じた。

「？」

視線を感じる方を見ると、ロックがセリスを見つめていた。
木色の瞳に真っ直ぐに見据えられ、セリスは胸の鼓動を早めた。

「・・・え、あ、な、なに・・・？」

見られていたことに全く気付かなかったセリスは慌ててロックに聞く。
すると、微かに頬を赤らめたようなロックが照れたように口を開いた。

「いや、なんかつい・・・なんとなくセリスを見たら、・・・笑ってたから。」

「え？」

自分を見て、笑っていたから？
ますます意味がわからない。

そういう表情をしているセリスに、ロックは「コホン」とわざとらしい咳払いをし、言った。

「だから、その・・・笑ってるセリス、・・・綺麗だなんて思って・・・思わず、ずっと見てた。」

それからロックは恥ずかしそうに視線を宙に反らした。
セリスはロックのいきなりの言葉に、一瞬で赤面した。

「え、あ、・・・・・・・・・・」

なんと言葉を返して良いかもわからない。

困ったように俯き、下に咲き誇っている美しい花たちに目をやる。
すると・・・

「きゃっ!?!」

ロックがいきなりセリスの手を取り、歩き出した。

「え、ちょ、ロック!?!」

まだ僅かに赤い顔をしながらセリスはロックの起こした行動に目を丸くする。

背の高い花々が自分たちを隠すように咲き乱れ、その中を掻き分けながら進む。

セリスは奇妙に思った。

明かにロックの雰囲気が先程とは全く違い、張り詰めたものだった。
やがて花の洞窟が終わり、2人は広い野原へと出た。

そこは、花畑の奥に見えた丘だった。

小さな花と葉がバランス良く生えていて、花畑とはまた違った雰囲気
の美しさを出している。

「ロック・・・・・・・・?」

セリスはなにも言わずに急にこんなところまで自分を連れてきた人

物を覗きこむ。

すると、ロックはそつとセリスの細い指に絡めた自分のがっしりとした手を離し、ゆっくりと言った。

「……俺、さ。花畑って、思い出があるんだ。」

「思い、出……?」

しばらく考え、しかしすぐにハッと顔を上げた。

「……もしかして……レイ……チェル、さん……?」

ロックはセリスを真っ直ぐ見つめ、ゆっくりと頷いた。

「……あいつは……昔っから花が好きだったんだ。だからある日、一緒に花畑へ行っただ。……そう、これくらい、すごく綺麗な花畑に。」

「……」

「その時、レイチェルも……笑ってたんだ。『綺麗だね』……ってさ。そこの花に負けないくらい華やかな笑顔で。」

ロックは一呼吸置いて、再び話す。

「さつき、セリスが微笑んでるのを見て、この花たちのどれよりも綺麗だと思ったんだ。……だけど……」

「……私と、レイチェルさんの顔が……重なった……?」

ロックの言わんとしていることを先読んで、セリスは重々しく口を開いた。

首を縦に振り、ロックは肯定する。

「・・・・・・・・あぁ。」

「・・・・・・・・そう・・・・。」

セリスは、先程ロックが花畑に引き込まれそうな程見入っていたことを思い出す。

それは、ロックが自然に興味があるんだと思った。

また1つ、ロックのことを知れたと思った。

だけど、それは違い・・・・・・・・、

「・・・・・・・・ずっと、・・・・・・・・レイチェルさんのことを思い出していたの・・・・・・・・・・・・・・？」

セリスは瞳を潤ませてロックに問いかける。

「さっき、私を綺麗だと言ってくれたのも、全部・・・・・・・・レイチェルさんのことを言っていたの？」

「違う、そういうことじゃなくて・・・・」

「そういうことじゃない!!！」

セリスは思わず叫んだ。

「だって、そういうことでしょ!?! この花畑に私といても、ロックはずっとレイチェルさんのことを想っていたんでしょ!?!?」

「ずっとじゃない! ただ、さっきセリスの顔を見たら・・・・」

「私の顔を見たらレイチェルさんのことを思い出すの!?!?!?」

ロックを睨みつけ、想いをぶつける。

「所詮、ロックはレイチェルさんのことしか頭にないのね・・・・私

なんて、レイチェルさんの代わりに過ぎないのよね!」

「セリスッ!!!!」

ロックは声を荒立ててセリスを怒鳴った。

「セリスをレイチェルの代わりなんて思っていない! そうじゃないんだ!!」

ロックは懸命に言った。

しかし、セリスの顔からは影が取れなかった。

「……. だったら、なに? 代わりでなければ、私はロックのなんだというの? 私、ロックが……. 私は……. 恋人だと思ってた。」

「俺だってそうだ! セリスを恋人だと思ってる! ただ…….」
「もう良い!!」

ロックの言葉を遮り、セリスは消え入りそうな声で言う。

「もう、良い……. 聞きたくない……. そんな言い訳。私は……. レイチェルさんの代わりで、それ以下でも以上でもない。そういうことでしょうか?」

「それは違う!! セリスはレイチェルじゃない! セリスはセリスだっ!!」

「だったらどうしてよ!! どうしてレイチェルさんのことを思い出すの! どうして……. っ…….」

悲しくて。
哀しくて。

「・・・セリス・・・・・・・・」

寂しくて。
悔しくて。

「・・・・・・・・ごめんな・・・・・・・・。」

愛しくて。
恋しくて。

それは、自分だけの想いだったというのか――・・・・・・・・

「・・・何に、謝っているのか・・・・・・・・わからないわ・・・・・・・・」

ロックの言葉の意味を理解できず、セリスは吐き捨てるように言う。
そして、黙ってロックに背を向け、自然の虹に染まった丘を去った。

――一滴の、ひとしずく涙を頬に伝わせて――

「・・・・・・・・っ・・・・・・・・」

ロックはなにか言おうと口を開きかけ、しかし言葉が見つからずに口を閉じた。

――伝エラレナイ――

（違う、こんな風になる為に言ったんじゃないんだ・・・・・・・・っ）

『君とレイチエルは違う』

どうしてもっと、その言葉をたくさん彼女に言わなかったのだろうか。

——彼女ヲ、傷ツケタ——

愛している。

誰よりも、心から。

なのに。

自分は、あの戦いから何も変わっていない。

（あの大战の中でも、セリスを何度も傷つけた・・・・・・・・）

初めて出会った時。

本当に驚きを覚え、レイチエルが生き返ったのかと思う程似ていた。そして強がりなところも、本当は弱いところも、まるでレイチエルの性格そのもののような気がした。

しかし、いつからか。

セリスを見ても、レイチエルは浮かんでこない。

そう、セリスしか、映らない——

（セリスしか、見えないんだ・・・ただ、時々昔が蘇ってきて——
——・・・）

そう。

鮮やかだった、日々。

今だ色褪せない、鮮明な記憶。思い出。

セリスが、レイチエルに見えてきてしまうときがある。

(・・・今日だって・・・)

ロックは握り拳を作り、掌に爪を立てる。

どうして傷つける事しかできないのか。

なぜレイチェルを忘れる事ができないのか。

全て、答えは自分の中にあった。

花が、舞う。

風に攫われた花卉は、何処へ行くのか。

本体を離れ、独りきりで。

太陽の光、花、風。

緑、赤、黄色。

全てが、色を無くす。

——君ト見ナケレバ意味ガナインダ——

それは、どちらのことなのだろう。

君とは。

どちらを指しているのだろう——・・・

前編　　くいつのまにかの恋模様　　（後書き）

FF6は1番最初にクリアした思い出深い作品です。

ロックとセリスのカップリングが大好きなので、この2人の恋模様を追ってみました。

後半も頑張って書きたいと思いますので、よろしく願いします！

※ちなみに、文中にロックの剣はラグナロクとなっていますが、私はいつもロックにラグナロクを持たせていただけでラグナロクがロックの愛剣というわけではありませんよw

中編く花陰の光く

途方もなく、歩く。

ただ、ひたすらに何処かへ。

暗闇の中に佇んでいるよりは、歩いて前に、進む。

花畑の丘を降りてから数十分。

セリスは砂漠の大地を踏み歩いていった。

ナルシェへ帰ろうと思ったものの、時期にロックが帰ってくるであろうことを予想し仕方なくフィガロへと向かっていたのだ。

かつて共に戦ったフィガロの若き王・エドガーと、その双子の弟・マッシュユがいる国だ。

エドガーは国のことで手一杯、マッシュユは修行に励んでいるだろうと思いつつ他に行く宛のないセリスにとって唯一の逃げ所だった。

（さっきフィガロに出向いたところなのに、また行く羽目になるとはね・・・。）

そう、先程花畑に行く前にセリスはロックと一緒にフィガロへ遊び

に行っていたのだ。

その時はエドガーもマッシュもそれぞれ前もって予定を調整して時間を作ってくれた。

しかし、今は連絡もなにも入れていない。

突然訪れては迷惑ではなからうか。

(・・・でも・・・戻れない・・・)

ロックとの先程の喧嘩。

それが気まずくて帰れない。

でも、本当に帰れない理由は・・・

(・・・レイチェルさん・・・)

昔のロックの恋人。

今は亡き、故人。

(・・・ロックは・・・まだレイチェルさんのことを・・・
っっ)

思うと、胸に激痛が走った。

セリスは広大な砂漠に1人蹲り、手の平を胸に押し当てる様にして荒くなった息を整える。

随分歩いた所為か、それともロックのことを想った所為か・・・

ファイガ口城は大分近づいてきており、立派な城の本体が視界に映る。セリスは仕方なさそうに立ちあがり、再び鳶色のブーツを砂中に沈めた。

すると、

「あれ？もしかして、セリス？」
「？」

どこかで聞き覚えのある声がセリスの耳に届いた。
驚いて声のする方へと振り向く。

するとセリスの瑠璃色の瞳には、鮮やかな常磐色の美しい髪を靡かせる1人の女性が映った。

風に揺れる髪を片手で押さえ、シグナルレッドの麗質な肩出しワンピースがよく似合う――

「ティナ！？」

「あ、やっぱりセリスね。」

ティナと呼ばれた女性はセリスを見て、にっこりと微笑んだ。

かつて帝国にその魔導の力を利用され、また幻獣と人とのハーフの女性・ティナ。

彼女もまた1年前に同じ戦地で共に戦った人物だ。

2年前までは感情など全く存在せず、ガストラ皇帝率いる帝国にその強大なる魔力を利用されていたが、ロックとの出会いで次第に感情が芽生えたのだ。

そして、それから2年後の今。

ティナは豊になった感情を露にセリスの前に立っていた。

「久しぶりね、セリス。1年ぶり・・・かな？」

嬉しさを隠さないで相変わらず穏やかな雰囲気のティナに、セリス

も疲れきった心をゆるすように微笑む。

2年間一緒に戦い、1年前に別々の道を選んだ仲間。

「ええ、そうね。元気そうで良かったわ。」

「そっちなね。あれ、そういえばロックは？」

ティナはいつもセリスと一緒にいる、自分にとって大の恩人のロックがいないことに気付いた。

セリスは一瞬顔を強張らせたが、すぐになんでもないように答える。

「・・・ロックは今頃ナルシェにいると思うわ。」

花畑での出来事から1時間近く経つ。

多分ロックはもうナルシェに帰っているだろう。

「そうなんだ？珍しいね2人が一緒にじゃないの。それより、セリスもフィガロに用事？」

「用事・・・というより、まあそんな感じかな。」

さすがにロックと喧嘩をしたとは言いにくく、曖昧に誤魔化した。するとティナが思いついたように人差し指を立て、提案する。

「じゃあ、一緒に行こうよ！折角の久々の再会だしね。」

仲間の中で唯一同じ年の女の子。

互いにそんな認識があったのだろうか、セリスも嬉しそうに

「ええ。」

と承諾した。

2人で話しながら歩いていると、いつのまにか城に着いてしまった。

「なんか早いね。」

ティナが少し残念そうに笑う。

「話していると、あっという間というものね。」

セリスも物足りなそうに言うと、城の警備兵に軽く会釈して城門をくぐる。

「わー……。なんか、懐かしい……。」

ティナが感嘆の声を漏らす。

機械文明の先進国・フィガロ。

決して大きな国でこそないが、世界中で1番機械文化が発達している王国だ。

「そうか、ティナは1年ぶりなんだものね。」

感動するティナを見てセリスは納得する。

「良いなく、セリス達は近いからいつでも来れるものね。私はモブリズからは滅多に外に出ないから……。」

ティナは少し寂しそうに言った。

その様子を見て、セリスは思い出した。

ケフカが神と同等な程の力を手に入れ、小さなモブリズという村を破壊したこと。

そして、大人達は皆子供を守るために命を落とし、ティナはそんな村を見て初めて“愛”という気持ちを覚えてその村に留まる事を決めた。

「そういえば、今日子供達の世話は良いの？」

セリスはモブリズにいるたくさんの子供たちを思い浮かべた。

「うん。今日はね、カトリーナがみんなの世話をしてくれることになったの。」

どおりでティナが堂々とフィガロに赴いていると思った。

セリスはティナの活き活きとした姿を見て溜め息が出そうになった。

（・・・これからどうしよう・・・。）

おそらく、ロックがレイチェルを忘れなければ解決できない問題だった。

しかし、ロックにとってレイチェルは果てしなく大きな存在で、忘れろと言う方が無謀に近かった。

（・・・でも、このままなんて嫌・・・。）

自分からはどうすることもできない。

全ては、ロック次第。

それを思うと気を失うほど目の前が真暗になる。

（他の皆はあの戦いから自分の生活を幸せに送っているというのに・・・どうして私達はこんなに・・・）

米神を片手で押さえ、セリスは必死に遠くなりそうな自分の意識を保っていた。

「・・・リス・・・？・・・セ・・・ス・・・セリス！？」

「あ、えっ？」

思考を中断させ、セリスは慌てて横に立つ人物を見る。

気付くと、いつのまにかティナが心配そうに自分の顔を覗きこんでいた。

「どうしたの？セリス。具合悪い？」

あからさまに心配と顔に書いた表情でティナは聞く。

セリスはまだ思考が頭にこびり付く中、小さく首を横に振り

「平気よ。」

と返した。

「・・・そ、う・・・。」

セリスの蒼白の顔を見て心配じゃないと言えば嘘になるが、ティナは仕方なく納得したように頷き、「行こうか」と言って城の奥へと進む。

セリスも黙って踵を返し、ティナの後へと続いた。

「あっ！！！！」

エドガーとマッシュが来るまでに城のVIPルームの待合室で待たされていたティナは、大声を上げた。

「ねえねえセリス！見て見て！！これ、最後にリルムに皆の似顔絵描いてもらった時の絵だよ！！！」

ティナは嬉しそうにソファに沈めていた体を浮かせ、窓際に置かれている2つの肖像画を片方ずつ手に取った。
エドガーとマッシュ、それぞれの特徴を完璧に再現し描いた見事な絵だった。

「わあゝ・・・！」

まるで写真のようにそっくりな肖像画を見て、ティナは懐かしんだ。
あの戦いの後、離れ離れになる仲間たちへのプレゼントとしてリルムが1人1人に描いてくれたのだ。

「私も似顔絵窓際に置いてるの！朝1番にカーテンを開けた時いつも見て、みんなのことを思い出してるんだ。」

「ティナも？」

セリスは少し驚いた表情をした。

「？ うん。セリスはどこに置いてるの？」

ティナは微笑んで首を傾げながら聞く。

セリスは少し間を置いて答えた。

「・・・私とロックも、窓際に置いてるの。」

「え、セリス達も!？」

余程驚いたのだろうか。

ティナは碧の目を大きく見開いて驚愕の声を上げた。

そして、ティナ程ではないがセリスも充分驚きティナを見据えた。

「・・・偶然って、気がしないわね・・・。」

セリスは微笑しながら言った。

「・・・本当、ね。まさか、他のみんなもそうだったら楽しいね。」

そして、ティナが愉快そうにころころと人懐っこく笑う。

セリスはそんな幸せそうなティナを複雑そうに見つめていた。

2人で話していると、随分時間が過ぎたようだ。

豪華な飾りを幾つも施している天窓から射し込む陽光が橙を帯びた光となり、夕暮れ時を報せる。

「もう夕方なのね。」

ティナはいつの間にか過ぎていた時間に気付いて驚いた。

セリスも数時間は待たされたというのに、全く気付かなかった。

（やっぱり、久しぶりに仲間と会うというのは良いものね。）

今まで時間を気にしなかったのは、やはりその為であろう。
ソファの背もたれに体重を乗せ、セリスは改めてあの2人がいつも
どれだけ忙しいのかを実感した。

（仮にも一国の王と王子だものね・・・。）

王国の経済から自治まで全てを任されているエドガーと、人一倍熱
い情熱を修行に注ぎ込んでいるマッシュ。

いきなり赴いた客に等、なかなか時間を裂割けないのも無理はない
のだ。

もちろん、それを承知で来ているのだから不満など持つはずもない
のだが。

天窓からの淡い光を眩しく思い、瑠璃色の瞳をそっと瞼で隠す。

瞼の裏には、真暗闇と、そこに佇んでいるロックの姿がある。

自分を振り向こうとしているのだが、やはり考え直し振り向かない。
この映像がセリスの思考を支配する。

——ヤハリ、レイチエルサンヲ選ブノネ——

ロックの大切な人だった。

自分でも、それはわかっているつもりだった。

3年間、ロックはずっとレイチエルを行き返らせる方法を探してい
た。

そして、ついにそれを見つげ出し、レイチエルを一時的に蘇
らせた。

それほどまでに、彼女を心から想っていた。

セリスは2年前からロックのそんな姿を見ていた。
だから、ロックの気持ちは理解しているつもりだった。
しかし、実際には全く理解のできないもので・・・。

――何ヲドウスレバ良イノカワカラナイ――

歯を食いしばり、暗闇の中必死にロックを呼ぶ。

――ドウカ、自分ダケニ振り向イテ――

そして、叫ぶ。

――ドウシテ、私デハダメナノ――

しかし、何を言ってもロックは振り向かない。
天を仰いで、レイチェルを思い出すことしかない。

どうしたら、1番良いのか。

どうすれば、ロックを振り向かせられるのか。

どうやれば、自分のことだけ考えてくれるのだろうか。

自問自答を、繰り返す。

次第に意識が遠くなり、セリスは閉じた瞼を更に深く瞳の上に被せた。

夢の中、ロックがいた。

何も言わない。

何もしない。

ただ、人形のような彼が。

自分にはもうどうしようもない。

なにもできない。

彼を、ただ見つめる事しか。

やがて、彼が手を差し伸べる。

いつもの、優しい木色の瞳で。

そっと、無言のままその手を取る。

しかし、すぐにすり抜けた。

その手を取るのは・・・自分では、なかった。

ロックに見つめられ、手を差し伸べられたのは――――

蒼い髪の毛を持つ、自分と似た容姿の・・・・・・・・・・

「嫌あっ！！！！」

「セリス！？？」

「やめて！！違うの、駄目！嫌！嫌っ！！！！」

「セリス、落ちつけ！」

こんじき

金色の髪が激しく左右に揺れ、その揺れを制止する声を聞き取って

セリスはようやく意識を取り戻した。

潤んだ目を大きく見開いて、セリスは自分の細い手首を掴む人物を見た。

自分より少し黄味が濃い金髪を後ろで結わえ、王家の紋章が入った服を着た長身の凛々しい表情をした――・・・・・

「俺がわかるか、セリス？」

「……エド・ガー……」

ゆっくりと、セリスはフィガロ国の王・エドガーの名を呼んだ。

エドガーは頷いて言う。

「そうだ。さっき仕事がようやく片付いてな。客間にセリスとティナが待っていると聞いて、来てみたらいつの間にかお2人は仲良く就寝ということだ。」

「え、……あ。……私、寝てたの？」

「あまり寝心地良さそうな顔はしていなかったがな。ティナと2人でソファに寄り掛かりながらよく寝てた。」

セリスは周りを見渡し、ここがベッドルームだということに気が付いた。

「わざわざベッドに運んでくれたの？」

すると、エドガーは微笑^{わら}って答えた。

「いや、あまりにもぐっすり寝ていたからそのままにしておこうと思ったんだが、ばあやがな。このままじゃ風邪を引くと言って兵に2人を運んでもらったんだよ。」

セリスは“ばあや”と呼ばれた気難しそうな神官長を思い出した。

「そう、ありがとう。そういえばティナは？」

「ティナならついさっき起きて別の部屋でマッシュと話しているよ。マッシュは俺より先に修行が一段落したようだな。」

「……そう。」

セリスはどこか暗い影を顔に落とし、ベッドに沈めていた体を起こした。

ベッドに備え付けられた薄いレースのカーテンを開け、エドガーを真っ直ぐに見た。

「今日は、忙しい中2度も来てしまってごめんなさい。」

エドガーはセリスが遊び半分に来たのではないことを知り、真剣に返す。

「いや、俺こそ長い時間レディ達を待たせる事をしてすまなかった。」

フェミニストな彼ならではの悪戯な返答を聞き、セリスは頬を緩めた。

「ふふ。」

しかし、やはりいつものセリスとはどこか違う雰囲気を感じ取り、エドガーは再び真剣に聞く。

「・・・ロックと、なにかあったのか？」

いきなり凶星を突かれ、セリスは体を一瞬震わせた。

「・・・そうか。」

セリスの反応を見て、エドガーは大きく溜め息を吐いた。

「レイチエルとのことか？」

鋭い痛みを持つ彼に再び見抜かれ、セリスはゆっくりと首を縦に動かす。

エドガーは言葉を選びながら、慎重に言った。

「・・・あの男とは、俺も随分と長い付き合いになるが・・・レイチエルと一緒に居た月日はさぞかし長いんだろう。今だにレイチエルを忘れることができていない。」

セリスは思い返した。

旅の途中、何度も何度もレイチエルを想いながら苦しみ、悲しみ、だけど決して諦めずにレイチエルを生き返す方法を探していたロックを。

自分と出会うずっと前から、探し続けていて・・・。

世界が崩壊しようとも、レイチエルを諦めることはなく、そして再会したときにロックはついにフェニックスを探し当てた。

世界が崩壊して月日が経ち、1年ぶりの再会だったというのに。

自分には目もくれず、迷うことなくコーリンゲンの村に行きレイチエルを生き返した。

たった、数分の出来事だったけれど。

ロックは、どこか寂しそうにレイチエルとの最後の別れをしたけれど。

全てが、ようやく終わったのだという表情をしていた。

「・・・ロックは、あの数分の為に・・・何年もレイチエルさんを生き返す方法を探していたのね・・・。」

「・・・ああ・・・。」

セリスは掛けられた布団を握り締め、苦い思いに浸った。

やがて、少しの間を置いてエドガーが口を開き始める。

「・・・それほど、あいつにとってレイチェルは大切な存在だったんだ。」

セリスはエドガーを見る。

「もう、理屈じゃなかったんだ。レイチェルを想うということは。愛しさや、恋しさを超えて、ただひたすらに己の犯した罪を償いたい気持ちと、もう1度レイチェルに会いたい気持ちとが重なり合ってあいつを動かした。」

理屈じゃない・・・。

セリスは、その言葉にどれだけロックの思いが込められているのかを改めて思った。

「今、あいつにはお前という大事な恋人がいる。だけど、理屈なしで何年も想い続けていたレイチェルを・・・簡単には忘れられないと思うんだ。わかるか・・・？」

エドガーの真剣なコバルトブルーの瞳に見つめられながら、セリスは言葉を放つ。

「・・・ええ・・・。」

それは、わかっているつもりだった。

———だけど———

「・・・それでも・・・それでも、世界で1番大切な人に自分だけを想っていて欲しいと思うのは・・・罪な事なの？」

エドガーは驚愕した顔になる。

「私は・・・私には、ロックしかないの！ロックでなければ駄目なの！！」

「・・・セリス・・・。」

「レイチェルさんのことを忘れられないのなんて、わかってるつもりだった！だけど、それでも私のことを1番に想ってほしい！せめて私といるときだけは・・・。」

叫び声が、やがて嗚咽に変わる。

「嫌よ・・・ロックの1番が良い・・・レイチェルさんのこともひっくるめて私を想ってほしい・・・1番に・・・。」

「だったら、それをちゃんと本人に言わねけりや伝わらないぜ？」

不意に、部屋の入り口から声が割りこんできた。

セリスとエドガーが扉の方を見ると、2人共がよく見知った顔があった。

「マッシュ・・・。」

セリスは呟くようにマッシュの名前を呼んだ。

エドガーとよく似た容姿のマッシュはその呼びかけに応えず、話し続ける。

「悪いな。さっきから聞かせてもらってたんだけどよ・・・それはロックが悪いよ。昔の恋人が忘れられない？だからセリスといても

レイチェルを想ってしまう？冗談じゃねえよ。昔もなにも、今の恋人はセリスなんだ！過去の恋人より、現在の自分を想ってほしいってのは当たり前じゃねえか！」

「そうだよ。」

怒号にも似たマツシュの叫びに、後ろに潜んでいたティナが顔を出し言う。

「ロックはセリスを選んだんだよ？だから今までずっと2人でいたんでしょ？だったら、セリスはロックの1番であり続けなければいけない・・・セリスの他に1番なんてこと、あってはならないんだよ。」

「自信持てよ。大丈夫だ、ロックの目え覚ましてやるにはセリスは充分すぎるって程適役なんだぜ？」

ティナとマツシュの言葉にエドガーも賛同する。

「そういうことだ。少なくとも、セリスにはロックに意見を言う権利がある。隠さなくて良いんだ。」

「マツシュ・・・ティナ・・・エドガー・・・・・・・・。」

セリスの瞳から大粒の雫が流れ落ちる。

「・・・・・・・・・・ありがとう。私・・・ロックに、言う。」

自分だけを想っていてほしいこと。

愛しているのは、自分だけだと言ってほしいこと。

安心したいこと。

不安にさせないでほしいこと。

全部を、彼に伝えよう。

「忘れないでね、セリス。」

城を出る際、ティナに贈られた言葉。

「セリスの思っていることは、決して我侭なんかじゃない。当たり前の事なんだよ。」

優しい言葉に、セリスは深く頷き、華のような笑顔を返した。

中編く花陰の光く（後書き）

こんな風になりました—え？

いやあ・・・ティナは別に平気だけど、意外とエドガーとマッシュの書き方が難しかったです；；；

特にマッシュ・・・あんた、こんな喋り方でしたっけ？—え？

次はいよいよラストです。最終回です。

どうなるんでしょうか、ロックとセリス・・・いや、本当にどうなるのさ。—無責任。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9363a/>

花畑（FF6）

2010年10月10日04時10分発行